



山谷全体を ホスピスにしたい

——ドヤ街でホスピスケア施設を運営

山本 美恵 さん

Yamamoto Mie

NPO法人 山谷・すみだリバーサイド支援機構 理事／看護師

心臓血管研究所付属病院、新赤坂クリニック勤務を経て、医薬ジャーナル社、メヂカルフレンド社にて雑誌の編集に携わる。2001年に山本雅基氏と結婚し、同年3月、緊急一時保護施設「なかよしハウス」を設立。その後、10月に在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」、06年にヘルパーステーション「ハーモニー」を開設。「きぼうのいえ」を運営するNPO法人として山谷・すみだリバーサイド支援機構が承認され、理事に就任する。

看護師としての

さまざまな経験が生きる

東京の隅田川に近い下町の一角に、“山谷”と呼ばれる街がある。高度経済成長期は日雇い労働者を供給する寄せ場として発展したが、バブル崩壊後の不景気を経て、現在は高齢化が進み、街全体が年老いてきた。

山本美恵さんは、夫である雅基さんと2人で、この山谷の地にホスピスケア施設“きぼうのいえ”を開いた。屋上にある小さな礼拝堂には、ここで生涯の最期を過ごした人たちの写真がずらりと並んでいる。

山本さんは、高校時代に友人を亡くしたことをきっかけに看護の道に進み、循環器の専門病院とクリニックの外来で11年間、看護師としての経験を積んだ。

その後、医薬系出版社に転職し、さらに看護系出版社で看護学生のための雑誌編集に携わるようになる。手がけた雑誌の発行部数は順調に伸び、増刊号は増刷を重ねた。

しかし、大きな転機が訪れる。長く付き合っていた恋人が突然亡くなった。大きな苦しみの中、“人は死ぬとどうなるのか、人は何のために生きるのか”を考え続け、さまざまな本を読みあさり、その中で人生観・価値観の大変革が起こる。

「それまでは、人の流れに逆らわずに生きるよう、自分で行動を制限する“枠”をつくっていました。しかし、自分を押し殺して生きるのはやめよう、自分の良心を信じてやりたいことをやろうと決めたのです」

そのようなときに、大学の社会人講座「ホスピス・ボランティア」で

夫となる山本雅基さんと出会った。雅基さんの夢は“ホームレスのためのホスピスを開設すること”。

「それを聞いたときにすごくいいなあと思って。会って3回目で結婚を決めました」

結婚してすぐに山谷を訪れ、蓄えをすべて投入して土地と家を購入した。その年の10月に“きぼうのいえ”がオープンする。

「いろいろなことがあったけれど、すべてが私の財産になって、役立っています」

と山本さんは穏やかに話す。

入居者の居場所をつくる

“きぼうのいえ”のケア

“きぼうのいえ”には、元ホームレスの人、身寄りがなく1人で暮らすことのできなくなった人など、

21名の入居者がいる。ほとんど全員が生活保護を受給しており、この入居者たちを、山本夫妻をはじめとする約20名のスタッフとボランティアが支えている。

「開設当初は寝る間もないくらい忙しかったけれど、今は館内をぶらぶらしながら入居者さんやスタッフと話ができるようになりました」

と山本さんは言う。もちろん、そのようなときでも、援助者としてのアンテナは立っている。

「“きぼうのいえ”のみんなが笑顔でいてほしい、と思っています。だから、常に雰囲気丸くなっているかどうか館内全体を見て回ります」

山本さんは施設全体を把握する、まさに女将さんの役割を果たしている。入居者の健康が少しずつ衰え、医療処置が必要になると看護師としての出番が増える。入居者の体調についてスタッフから相談を受け、アドバイスをする。吸引や薬の管理、容態をみながら訪問診療医や訪問看護師との連絡調整も行う。

「薬の調整など、医療知識がないとわからないこともあるので、私が看護師でよかったと思います」

入居者の断絶している家族との関係修復に向けて橋渡しを担うこともある。対応が難しいときは、ミーティングでスタッフと何度も話し合う。

「入居者の抱える問題がそれぞれ違うので、“1人の問題をクリアした”と思っても、次の人のまた違った問題が出てきます。常にみんなで悩みながら取り組んでいます」

山谷で生活する人は、社会に順応できずにはみ出した人が多い。

「ここでは生活のルールを、その人に合わせて少し広げてあげるので。 “はみ出した分に伴う危険は、私たちが見守っているからいいよ” という思いが伝わると、自分の居場所ができて、みんな落ち着きます。

そうすると私たちスタッフに対して気づかう余裕も出てきます」

と山本さんは言う。このようなかわりが、山谷の超・個性的な高齢者たちとのやりとりを可能にしているのだろう。

「その人とのルールが確立すると、すごくいい関係ができる。そうなるまでに少し時間がかかるけれど、その満足感は大きいですね」

利用者の生き方を受け入れ ケアをしてほしい

看取りを行う“きぼうのいえ”には、訪問看護師のかかわりが欠かせない。「山谷地区には信頼できる訪問看護ステーションがあるんですよ」と言う山本さんは、訪問看護師には“在宅のよさ”を生かしたケア

をしてほしいと訴えた。

「たとえ、医療的に正しいとされる病気への対応やケアの方法でも、それを受け入れられない人がいるんです。そのような場合はできる限り利用者の生き方を受け入れてほしいと思います。もちろん、その分注意深い見守りが必要となりますが」

在宅は、病院のように完璧な医療を提供する場所ではない。相手に合う医療を創造して、生活を支えていくことが大切なのだ。

*

山本さんは一昨年、ヘルパーステーション“ハーモニー”を立ち上げ、訪問介護事業を始めた。

「山谷には約3000人のお年寄りがドヤで暮らしていると言われていいます。寝たきりになっている人も多いです。しかし、“きぼうのいえ”で受け入れられる人数はかぎられています。“ハーモニー”を充実させて、“きぼうのいえ”の“愛を伝える”精神を持つヘルパーを育て、ドヤのすみずみまで派遣して山谷全体をホスピスにしたいのです」

山本さんと雅基さんは、入居者に“2人で1つ”の意味で“二個一”^{にこいち}と呼ばれる仲良し夫婦。二人三脚の取り組みで、これからも“きぼうのいえ”のホスピス・マインドが山谷に広がりつづけるだろう。